
Short story 1

伶俐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Short story 1

【Nコード】

N8896N

【作者名】

伶俐

【あらすじ】

ほんの少し、人恋しくなる時刻、午前2時。
眠る気もしなくてただ夜空を見上げると、すごく聞きたくなる声がある。

そんな、都会の片隅で生きる彼女、佐田にかかってきた一本の電話。

それでもそばにいたいことを願うのは、
どうかわたしのことを覚えていてほしいという、
小さなわがまま。

夜空に星が瞬いている。

こんなに多くの星があるんだ、ということにいまさらながら驚く。
昼間は見えないけれど、これらの星はいつでも確かにそこに、ある。
実際はここからものすごく遠くにあつて、たどり着けはしない場所
なのに、それだけの輝きを放ちながら存在を表していることが、不
思議でもあり、すごいと思う。

わたしはいつたい輝けているのかなあと思う。

たくさんたくさんの人の中からわたしという人に輝きを見出す人な
んているんだろうかと。

もしかして、わたしが生を終えたあとに、わたしの輝きを見つける
人がいるのかもしれないなあ、と思つたら、なんだかおかしくなつ
た。

まあ、それでもいいか、なんて。

ふいに、ポケットの中の携帯が振動する。

取り出して液晶を見ると、ずいぶん久しぶりな名前が表示されてい
た。

「もしもし。」

『もしもし、ひさしぶり。久野だけど、わかる？』

「あ、うん。わかるわかる。ひさしぶりだね。」

『ずいぶん久しぶりだよな。番号変わったんじゃないかと思った。』

「あー、変えるの面倒だったからそのままにしていただけ。」

『あはは、なんかそれ、佐田らしいよな。』

「そう？そんなことないと思うけど。」

『いや、そうだって。なんか佐田って昔から変なところめんどくさがるから。』

久野は大学時代の同級生だ。上昇志向の強い奴で、常に前を向いているすごいエネルギーを放っていた。そんなギラギラしたエネルギーを持ちながらも周りの友人には優しく、人を蹴落としてまで上へ上がるうとする奴ではなかった。

そういう彼の周りには常に多くの人がいた。

もちろん、同じクラスだったこともあり、話したことはある。一緒に飲みに行ったこともある。でもその程度だ。他のクラスメイトに比べればわたしと久野の付き合いは薄くて短い。

「それで、どうしたの？」

そういうわけで、久野から電話がかかってくるのは本当に驚くことなのだ。だから、用件が気になった。

『いや、どうしてるかなと思って。だって佐田、いつもクラス会来ないだろ。この間だって来てなかったし。』

「あー、そういえばそうだね。」

『もしかして、めんどくさいって理由だったりする？』

「うん、その通り。」

『やっぱりかよ。』

そういつて久野は電話の向こうでひとしきり笑っていた。正直クラス会という場所は苦手なのだ。みんなの近況を聞いて、昔の話で笑って。そうしてみんなの輝きを目の当たりにすると、ものすごく嫉妬して落ち込む自分がいるのがわかるから。だから、行かない。もっとも、クラスのみんなも別にわたしがいなくなたって気にしないだろうと思っていた。もちろん久野も。

『で、ほんとに最近どうなの？』

「どうって・・・別に変わんないよ。普通に仕事して、普通に家に帰って寝て、それだけ。」

『なんか目新しいことってないの?』

「別がないよ。毎日おんなじことの繰り返し。」

『休みの日はどうしてんの?』

「んー、あんまり外にも出ないかな。ひたすら寝て、寝て、充電。」

『なんか不健康だぞ、それ。』

「そう? 実は自分でもそう思ってる。」

『でもあんまり直す気もないんだろ?』

「その通り。よくわかってるね。」

『だって佐田ちゃんだから。』

学生時代、クラスのみんなには佐田ちゃんと呼ばれていた。なんだか懐かしい響きだ。さすがに社会に出てからは「ちゃん」付けでよばれることはなくなった。

「久野はどうなの、最近。」

『俺? 俺は、うーん、まあ同じかな。』

「同じって、どんな感じ?」

『佐田と同じだよ。普通に会社行って、仕事して、たまに怒られて落ち込む。』

「久野も落ち込むんだ。」

『俺だって落ち込むよ。人間だし。』

「ふーん、そっか。」

返事を返しながら、気がついた。ちょっと久野の声のトーンが落ちた。なんとなく、あんまり突いちゃいけないところを突いてしまっただろうか。

「そうだよね。久野だって落ち込むよね。で、なんで落ち込んでるの?」

『えっ?』

「なんかあつたんじゃないの。」

結構確信があつた。自分に電話してくるくらいだから、何かあつたんだろうって。

電話の向こうで久野が大きく息を吐いたのが聞こえた。

『・・・なんで佐田ってそういうところ鋭いの?』

「だって、わたしに電話してくる時点でそう考えるべきじゃない?」
言って、わたしはクスクス笑った。久野が、まいったな、とつぶやいたのが聞こえた。

『これでもなんて切り出そうか、電話かける前にものすごい考えたんだけど。』

「わたしに電話かけるかどうかと、悩みの切り出し方、どっちのほうが迷った?」

『・・・佐田さん、これ以上僕をいじめないでください。』

棒読みでいじける久野は、電話口でもきつとしかめっ面でいじけた態度をとっているんだろう。想像するとおかしい。

「ん、わかったから。それで、どうしたの?」

とりあえず、先を聞くことにした。

『このあいだちょっと失敗っていうか、上司とちょっと喧嘩してさ。うちの会社は基本的にチーム組んで仕事するんだけどさ、別のチームの後輩がミスして俺に相談してきたわけよ。もちろん本来なら後輩は自分の上司に相談しないといけないんだけどさ、上司が出張で不在で携帯もつながなくて、急を要することだったからそいつものすごく焦って、それで俺に相談してきた。』

「うん。」

『そいつとちょっとした知り合いでもあったからさ、助けてやりたかったわけ、俺としては。幸い俺ができる範囲のことだったから、ちよつと助けたんだよ。』

「うん。」

『それで、その後輩はなんとかミスはカバーできた。』

「うん、よかったね。」

『ところがさ、後輩がそのことを上司に報告したんだよ。自分がミスして、俺に助けてもらったってこと。それは実際正しいことだと思っただ。ミスしたこととか、どう処理したかとか、小さなことでも報告しておかないと大変なことになるから。それはいいんだけど、その報告を聞いた後輩の上司が、俺の上司に礼を言いに来たらしいんだよ。』

「うん。」

『礼っていうか皮肉だな。「先日はどうも、うちの部下が君の部下に助けてもらったそうで。うちを助けてくれるなんてそちらもずいぶん余裕がありますね。おかげで今回はそちらより業績上回りしましたけど」ってね。』

「うん……。」

『でさ、そのあと俺の上司きれちゃって。そんな報告聞いてないって俺に怒ったわけ。だいたいなんで人のチーム助ける余裕が俺にあ

るのかつて。そんなことする余裕があるなんて、普段自分の仕事を手抜いてるからできるんだろうつてさ。」

「うん。」

「さすがにそれ言われたらちよつと俺も腹立って。「確かに報告しなかったのは悪いと思います。すみませんでした。でも、結果的には会社の業績に貢献しているのだからいいじゃないですか。」って言ったわけ。」

「うん。」

「そしたらさ、「お前はそれで仕事ができているつもりなんだろう？でもなあ、そんな仲良しごっこしているようなお前の能力なんてたかがしれてるし、上にも上がる器もない」って言われてさ。」

「うん。」

「いよいよ俺も腹立って、「俺は仕事をもっとできるようになりたいと思ってるけど、そこまでして上にいくような卑劣な人間になりたくない」って言ったわけ。」

「うん。」

「そしたらさ、その次の日から仕事の量が増える増える・・・日付が変わっても家に帰れないし、あきらかに雑用と思われるものも多いし、あ、ちなみに今も会社だったりするし。」

「うん。」

はあーっと、大きなため息が聞こえた。

「ごめんな、久々に電話かけてこんな愚痴で。」

「別に大丈夫だよ。」

「なんか佐田って聞き上手だよな。一気にしゃべっちゃまった。」

「そんなことないと思うけど?」

「いや、そうだよ。」

「ううん、ただ聞いているだけじゃん。」

「いや、すごい助かる。」

久野が苦しい顔をしているのが目に浮かんた。なんだかんだ言つて彼は我慢強い。いつも周りの愚痴を聞いたり、アドバイスをしたり

している。久野自身はあまり人にそういうところを見せたりしない。見せられないのかもしれないなあ、と思った。だからこそ、電話をしてきたのがわたしだったんだろう。

近くにいる友達だと、悩みを話したところで「そんなことくらい」って言われるのが怖い。久野は一流企業に就職しているから、なおさら人からそう思われる。いいところに就職してそれなりの給料をもらっているんだろうから、それくらいしんどくたって当たり前だとか。そんな悩みなんて日常茶飯事だ、とか。おまけに友達が仕事もしながら趣味もして毎日楽しく過ごしているのを聞いたりすると、ものすごく自分が情けなくなったりする。

だから、自分のことをある程度知っていて、なおかつ距離が遠い人つまりわたしのような人に悩みを話すのが一番楽なんだと思う。昔からなんとなく悩み事の相談を受けやすい原因は、きつとわたしが人からそんな距離をとって生活しているからなんじゃないだろうか。

「久野はさ、たまには立ち止まってもいいと思うよ。」

「えっ？」

「窓開けてみなよ。たぶんたくさん星見えるよ。」

「ちよつと待つて。」

こつこつ、と久野が歩いているだろう音が聞こえた。本当に窓のそばにいつてくれているらしい。

「あー・・・ほんとだ。都会でも結構見えるわ。てか、結構ビルの明かり消えてるし。もうそんな時間だもんなあ・・・。てか、佐田は何してんの、こんな時間まで？」

「ちょうど星見てたの。だから、星が見えるって言ったの。」

時計は午前2時を指している。

「寒くない？っていうか電話したの俺だよな・・・大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫。それよりさ、久野。」

「ん？」

「久野はもうちよつと、自分の弱みを見せたほうがいいと思うよ。」

みんな久野が頑張ってるってこと知ってる。久野は間違っていないよ。久野は久野のやりかたでいい。そういう久野だからみんな久野のまわりに集まるんだよ。みんなそれで久野に甘えてるけど、ほんとは心配してると思う。だから、周りに頼って、甘えてもいいと思うよ。そうしたほうがみんな喜ぶ。」

『……』

「久野はちゃんと、光ってるよ。久野だからみんな頼るし、久野を必要としてる。」

はあー、っと大きなため息がまた電話口で聞こえた。

『俺さ、佐田ちゃんに電話してる時点で甘えてるって思ったけどさ、やっぱり佐田が俺のほしい言葉をくれるってわかってたから電話したんだろうな。』

内心その言葉にはどきりとしたけれど。少しでもこの会話が久野の役に立ったならいい。

「そう？これくらいなら甘えているうちにも入らないと思うよ。」

『……そんなことない。』

「入らないよ。久野、いつもちょっと頑張りすぎ。結局最後は面倒なこと引き受けてひとりでやっちゃうでしょ。大学のときだって散々、面倒な会計引き受けたり喧嘩の仲裁したり、あぐくの果てに久野が悪者にされそうになったこともあるじゃない。久野は優しいから、それら全部を手放せて言っても絶対しないと思うんだ。でもね、もう少し自分を大事にしてもいいと思う。自分を大事にできるのは自分だけだよ。久野の代わりは誰にもできないんだから。」

『……佐田って、一見周りに関心なさそうにしているけどほんとよく人のこと見てるよな……』

「そんなことないよ。」

『そんなことあるって。』

それは相手が久野だからだ。大学の頃から彼はいつも輝いていて眩しかったから。その強い輝きは本当に羨ましくて、憧れた。あんな風に輝くことができれば誰かがわたしを見つけてくれるだろうか、

と思ったから。

『ちよつと泣きそうだわ。』

「久野くんを泣かすことができるなんて光栄です。」

ちよつとおどけて言うのと、こら、と小さな声が聞こえた。

実際、彼はほんとにきついんだろ。なんかちよつと、そばにいたら抱きしめてあげたいなあと思ってしまった。

「しばらくは忙しいんでしょ？じゃあひと段落着いたらご飯でも食べに行く？何か奢るよ。」

『ほんと？って、俺って食べ物で釣られるわけ？』

「だって、ほかに思いつかないんだもん。」

『まあいいか。めったに動かない佐田さんとお会いできるんですから。』

「光栄ですか？」

『はい。もちろん。』

まじめくさって答える久野がおかしくて笑うと、電話の向こうからも笑い出す声が聞こえた。

こんな風に大学時代に笑って話したことなんてなかったなあと思うながら、こんなのもいいなあと思胸の中があたたかくなった。

ひとしきり笑って落ち着いた頃、また久野が話し始めた。

『佐田も、あんま無理すんなよ。』

「え？」

『辛くても、言わないだろ。淡々とこなすだけで。』

「・・・・・・」

『知ってたよ、ほんとにしんどいこと。でも気づいてほしくなさそうにしてるから言わなかったけど。』

まさかそんなことを言われるなんて思わなくて、息が止まるかと思った。地味に過ごしてきたから、そんな印象なんて絶対ないと思ったのに。

『誰がなんと言おうとき、佐田はすごい頑張ってる。見てるから。だから今度は絶対佐田の愚痴聞くからな。』

その言葉にいろんな思いが胸の奥からわきあがってきて、一気に泣きそうになった。

「・・・なんか悔しいなー。励ましたと思ったのに励まされた気分。泣きそうなのを我慢して、つとめて明るく言う。」

『ははは、そりゃよかった。励まされっぱなしじゃなくて俺も少しは励ませたんだ。』

久野はこういう奴だ。本当に周りをよく見ていて、こんな夜空の隅にいるようなわたしのこともちゃんと覚えていて。だから好きだったんだよな、と、当時の思いを思い出した。

『佐田。』

「なに？」

『あのさ、』

「うん。」

『あの・・・。また、電話していい？』

「・・・うん。もちろん。」

『今の間、なに？もしかしてまづかった？』

「そんなことないって。意外だっただけで。」

『何が意外なの？』

「なにつて・・・わたしで役に立つのかな、って思ったから。」

『役に立つとか立たないとかの問題じゃないだろ。俺は佐田と話したいから電話するんだし。現に今だって俺が愚痴ってるだけで佐田

の役には立ってないじゃん？」

「そういう意味じゃないんだけど・・・。」

『やっぱ嫌？佐田は嫌でも嫌って言わないよな。』

なんかいじけた声を出す久野に、ちよつと笑ってしまう。

「ほんとに嫌じゃないから。嬉しいよ。こつやつて久野が電話してきてくれて。だからいつでも電話してきて。」

『してきて、つて佐田は電話してきてくれないの？』

ちよつと子供みたいな言い方で、次の瞬間には思わず思ったことをそのまま言ってしまった。

「かわいい。」

『はっ？』

「あ、いや、とにかく、こつちからも電話するよ。」

聞こえたかな、今の。かわいいつて言ってしまったよ。聞こえていませんように。

「久野、電話ありがとう。なんか元気でたから明日からまた頑張れる気がする。」

『・・・』

しばらく電話の向こうが無音になった。

そして今日何度目かのため息が聞こえた。

『佐田。』

「なに？」

『なんで先に言うの？』

「なにが？」

『それ、俺の台詞。』

「そう？」

『だって、俺が佐田に電話して、愚痴聞いてもらって励ましてもらったんだろ。』

「でもさ、わたしも励ましてもらって嬉しかったんだから、お礼言ってもいいじゃん。」

『そうだけど・・・、ま、いっか。そういう優しいところってやつ

ば佐田だな。ありがとう。』

ありがとう。

その久野の言葉はなんだかすごく、胸にきた。わたし自身に向けられる言葉がこんなに嬉しいなんて思わなくて。

「そう言ってもらえたならよかった。久野、体に気をつけてね。それから、久野はそのままでもいいよ。」

『・・・まじでありがとう。しかもこんな時間に。』

「うん。」

『近いうち、落ち着いたら必ず電話するから。』

「わかった。」

『なんかその返事、信用されてない気がする。』

「してます。電話待つてるから。」

『ほんとに?』

「ほんとだつて。」

なんか今日の久野は子供みたいだなあ、と思いながら笑った。でも確かに、あんまり電話がかかってくることは期待してない。だって、乗り越えたころはわたしのこと忘れているような気がするから。今日は偶然空気が済んでいたから、わたしの輝きが見えたんだろうし。

『じゃあ、またな。』

「うん。おやすみなさい。」

『おやすみ。』

彼が電話を切るのを待つてから、通話終了のボタンを押した。

なんか夢みたいだなあ、と思った。

今日の会話が少しでも久野の記憶に残ってくれればいいと思う。

本当に今日は偶然だったんだろうけど、たくさん見える星の中からわたしを選んで電話をかけてくれたこと、その前にわたしを覚えていてくれたことが嬉しかった。

「明日からまた頑張るか。」

こんな風に、また誰かが突然わたしを思い出してくれればそれでい

い。

6等星だっていいかな、そう思いながらベッドにもぐりこんだ。

「これ片付けたら会ってくれて言ってくれたんだし、もうちょっと頑張るか。」

煌々と明かりのついたオフィスで大量の書類を前に、ひとりつぶやいたのは通話終了後の久野。

「結構勇気出して聞いたんだけどなー。」

また電話していいか、って。

「あんま信じてなさそうだったけど、いつか。」

携帯の履歴の「佐田」という文字をみて表情を緩めたあと、久野は残りの仕事に取り掛かった。

End

3（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
ときどき眠りたくなって、でも誰かとつながっていたくてっていう、
そんなときがあるんですね。きっとそういうときは、寂しいのは
自分だけじゃないのかもしれないかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8896n/>

Short story 1

2010年10月11日00時03分発行